

かゆかわクリニック院長ブログ

かゆかわクリニックの前身は1996年6月1日に開院された岡田クリニックだった。1996年3月末日で名古屋大学を定年退職された岡田保博士がご自宅の隣にクリニックを開設された。19年間で6千名近い患者さんを日々診療された。睡眠時無呼吸症候群やナルコレプシー、むずむず脚症候群などの睡眠障害、不安症、うつ病、双極性障害、統合失調症、認知症、てんかんなどすべての精神疾患を診られ、PSG、脳波、MSLT、などの検査も精力的に行われ喜寿を過ぎても学会発表を続けられた。2015年4月末日で閉院された岡田クリニックは2015年5月1日にかゆかわクリニックに承継された。半世紀以上岡田先生に受診していた患者さんから「岡田先生はお元気ですか？」と歳度も聞かれることがあった。「岡田先生のお陰でなんとか人生を生きて来られました」と語る患者さんの声に添えて、岡田先生と面談する会を持つかと毎年考えたが、実現しないまま、岡田先生は旅立たれた。以下の追悼文は、日本睡眠学会のニューズレターに掲載されるものだが、当クリニックのHPの院長ブログでも掲載し、再会を果たせなかった患者さんにお伝えしたいと思う。岡田先生は、ご尊父の友人だった尾崎士郎の「人生劇場」を時々語られた。決して上手いとは言えなかったが、森繁久弥の「知床旅情」をカラオケで歌われることがあった。

かゆかわクリニック院長 粥川裕平



日本睡眠学会名誉会員 岡田保先生のご逝去を悼む

粥川 裕平

はじめに

睡眠時無呼吸症候群(以下 SAS)の名付け親が2018年9月29日に逝去された。SASといえば真先にその名前が浮かぶ岡田保先生、氣さくて優しいお人柄に癒された。日本睡眠学会の前身の睡眠研究会には発足時から参画され、わが国の睡眠研究の草分けの古閑永之助と本多裕の両先生を尊敬され、菱川泰夫、中澤洋一の両氏とは同年代の友情で結ばれていた。(日本の睡眠学の先達については、大川匡子監修 粥川裕平・小林敏孝編「日本の睡眠学 先達にさく」(ライフサイエンス 2013年)に記されている)

岡田保博士ご逝去の追悼文を記す。

① 睡眠ポリグラフ検査の技術革新

岡田保先生は、睡眠呼吸という生体现象に斬新な発想で検査を試みる新規・斬新性において際立っていた。1968年のR&KのPSG manualの脳波、筋電図、眼球運動、に口と鼻の空気センサー、胸部・腹壁の呼吸曲線を加えたPSG検査を1千例に実施された。誘発電位が全盛の時代に、週一例でも一年で五十例、牛歩のようなユックリズムだが、確実に山を登られた。

1975年、頑固な不眠を訴える肥満のない症例にSASを発見し、1977年のコペンハーゲンでの国際脳波学会で報告された。学会終了後、西欧最高峰モンブランに登頂された。忙中閑ありの御年45歳。

「これからはSAS一筋で行く」と決意し、岡田先生にしては珍しくreviewを書かれた。(岡田保「(睡眠時)呼吸障害を伴う睡眠障害」(上田英雄・島藺安雄・武内重五郎・豊倉康夫編 臨床症状シリーズ16 睡眠障害 南江堂1982年 pp158-183)

SASの生体への侵襲は、無呼吸に伴う覚醒反応の反復による睡眠の断片化に加えて、低酸素血症による隠微な慢性脳障害も見逃せないと着目し、動脈血酸素飽和度を非観血的に測定され、その結果を1985年の日本睡眠学会で報告され、わが国のSAS研究に一大革新をもたらされた。現在汎用されているデジタル化されたPSGに体位センサーやSpO2が標準

装備されているが、岡田先生が1990年にヘルスガイオン社に提言しなければ実現しなかった。SpO2の低下については、cyclic pattern以外に、continuous typeやREM-dominant typeの三類型を示された。EDSを訴える中高年のOSASと覚醒反応の乏しい加齢性OSASの違いを実証された。

こうしたPSG検査の技術革新をしながらSASの病態生理を深め、疫学研究で「SASが稀ならず存在する」と報告された。治療法ではTracheostomy、UPPPしかなかった時代に、acetazolamideの保険適用を目的とした睡眠時無呼吸症候群研究会で全国集計症例の半数近くを自験例で出された。1982年に開発されたCPAPの第一号を米国から一台持ち帰られ、いずれ日本でもCPAPが普及することを予期され、SASの予後や続発症についても検討された。

② SASの病態の更なる解明—低磁場MRIとNIRS—

整形外科の軟骨組織の運動機能検査に使われていた超低磁場MRIをPSGと同時に検査され、OSAの最中に呼吸曲線上は平坦んでも上気道動態は呼吸努力を続けていることを捉え1996年に論文にされた。MRIと同時のPSGではセラミック電極を考案された。OSAによる低酸素血症を近赤外分光法NIRS(うつ病診断補助として普及し始めた光トポグラフィ検査)を用いて解明された。

上記の SAS 研究の集大成を「閉塞性睡眠時無呼吸症候群—その病態と臨床—」(岡田保・弼川裕平編著 創造出版 1996 年)と題して単行本を刊行された。

③ 学際的・集学的研究の実践と人材育成

名古屋大学医学部の民主的な風土も幸いし、糖尿病学、放射線医学、神経学、生理学の同級生との共同研究もされ、名大病院脳波室長となられてからは、循環器内科、呼吸器内科、神経内科、脳外科、口腔外科、小児科など診療各科の講座の枠を超えた学際的・集学的研究を推進されたのは、全国的にも特筆すべきことではないかと思われる。

「今日私があるのは岡田保先生のお陰」と思っておられる同級生・後輩・同僚・教え子は可成りな数に上るのではないか。知的探求心のある若者を称賛し、斬新な研究方法論や新たな研究対象の展開を積極的に鼓舞された。徒弟的な体質の残存する医学界にあって、後輩に仕事やテーマを強要されなかった。「させられ体験は自由と自立を阻害する」という信念に基づいていた。名大医療技術短期大学部検査技師学科教授に就任後は、PSG 検査に興味を持つ検査技師の養成に尽力され 800 名近い検査技師を育成された。岡田先生の薫陶を受けた検査技師が各地で活躍しておられるのはなによりだ。

④ 開拓者精神を貫かれた岡田先生のルーツ

岡田保先生は 1932 年 10 月 25 日、愛知県岡崎市にお生まれになった。1945 年の敗戦後、家族の為に畑を耕しサツマイモを作って飢えをしのぐ労働をされた。戦後焼跡派を自認され、B29 の爆撃で焼夷弾が落ちて来る様を「ヒュルヒュルッ！」という擬音を発しながら戦争の悲惨さを語られた。1951 年に名大に首席入学され、1957 年卒業後インターンを経て名大精神科に入局された。「天皇」と評された村松常雄教授に、常に新知見^{クイニエス}を求められた。二年先輩の永津俊治博士(ノーベル賞学者 Arvid Carlsson の親友で DBH を発見された生化学者)の指導もあり統合失調症の生化学研究もされた。しかし、疾患群と

対照群の統計学的有意差で論ずる方法論は無理があると見切り、生体现象をリアルに捉える方法論が重要と確信された。

座右の銘は「石橋を叩けば渡れない」(第一次南極越冬隊長・西堀栄三郎)と「僕の前に道はない、僕の後ろに道は出来る」(彫刻家・高村光太郎)であった。

科学的認識論は武谷三男の三段階論で、脳波や PSG によって実体論のレベルで病態のエビデンスを出し続けられた。

学会発表は何歳になられても新人のように口述原稿を書き新鮮な感覚を持って臨んで、自験例と自らが確認したデータを前面に出し、他人の禪で相撲を取る主体性のないプレゼンは好まれなかった。

さいごに

2007 年の東海テレビ文化賞に応募した際、大川匡子博士、本間研一博士をはじめ全国から一流の睡眠学者十数名から推薦文が寄せられ、岡田保先生は受賞の栄誉に輝いた。(名大精神科同門ではノーベル賞、文化勲章、中日文化賞の受賞者不在の中での快挙だった)

四葉のクローバーを全て手の中に入れ、健康寿命の 73 歳を遥かに超えて八十歳過ぎまで現役で活躍され、男性の平均寿命を突破され、晩年には花鳥風月に癒しを求めておられた。最愛の奥さまを見送られて 22 年、お二人のお子さんの自立を見届けて、85 年の生涯を終え自然に帰られた。

ダンディでハンサム、チベットや中国の砂漠を旅して、写真撮影が趣味だった。嫉妬や羨望を超越し、誰に対しても礼節を保たれた。俳優の有島一郎に似た外観の岡田先生との四十年を超える長いご厚情に感謝申し上げると同時に、謹んでご冥福をお祈りするものである。

これからの SAS 研究と睡眠学の推進は皆様の双肩にかかっている。